真ネギま☆マギカＺ―外伝―

沈没船長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真ネギま☆マギカＺ―外伝―

【Ｎコード】
Ｎ２３７７ＢＡ

【作者名】
沈没船長

【あらすじ】
本編の真ネギま☆マギカＺの外伝的話。話しの間にあった小ネタやＩＦストーリーを適当に掲載！

模擬戦

紅き翼が完全なる世界に反撃を開始し、調査や協力者作りをしているとき。

そんな頭脳労働が苦手ｏｒ不得意な人物たち、ナギ・ラカン・マミの通称バグ戦隊は暇をもてあましていた。

この中に詠春も入る事があるが、彼とて次期日本呪術協会長なのだから多少の政治的駆け引きを心得ているので３人ほど暇ではない。

「暇だなぁ～」

「そうだなぁ～、マミ～いっちょ模擬戦でもしねぇか？」

「そうね～、連絡があるまでやることがないものね～」

最初は楽でいいやと思っていたがなかなか尻尾をつかめずにいる上に、原作よりも戦力が大幅に増えたせいで３人の仕事は減っていた。

雑魚や中堅なら機械獣と他のメンバーで余裕で潰せるが、３人が投入されるくらいの大物はそうそう引っかからない。

さすがに戦闘よりも休息が長いとやる事もなくなってくるようだ。

「ナギはどうするの？」

「昨日したから俺はいいや」

「ぬっふっふっふ、今日こそどっちが上か白黒つけようぜ」

「いつも引き分けですからね。いい加減決着をつけましょうか」

両者は少し距離を置き対峙しいつでも仕掛けられるように構えを取った。

「じゃあ、この石が落ちたら開始だぞ」

2人の戦いを見物するために少しはなれた丘に陣取ったナギが、開始の合図とするための石を投げた。

「ラカンーーー」

「光子力ゥ……」

そして、石が地面についたと同時に

「インパクト！（弱）」

「ビーム！（旧版＆弱）」

互いの必殺技の低威力版を同時に放ち試合開始のゴングを高らかに鳴らした。

それから数時間後、調査と下部組織を潰してきたアルビレオたちが戻ってきた。

「ナギ、戻りましたよ。ラカンとマミは……、あそこですか」

「おお、戻ったかお前ら。」

「また、やってるのか……。日に日にここいらの地形が変わっていってるぞ」

「あんな所に池なんぞなかったしの」

戦っている人物たちが規格外すぎるため周辺の被害もまたとんでもないことになっていた。

『ラカン・適当に連打！』

『光子力マシンガンパンチ！』

「今度は谷が形成されそうじゃの」

「無茶苦茶すぎるぞ……」

2人の拳打がぶつかり合った衝撃波が地面を削り徐々に谷ができている。

『気弾・ラカン玉！』

『光子力居合い拳！』

「人の技パクるなよ…。それにそれはただ拳圧をとばしてるだけだぞ」

「それよりも流れ弾があちこちにクレーターを作ってますよ」

遠距離ではらちがあかないと離れた距離を再びつめて始めていた。そしていいかげんに決着をつけるためにそろって必殺技といえるものを繰り出そうとしていた。

『うらぁ！ラカン！必殺パンチ！！』

『はぁ！光子力！ダイナマイトパンチ！！』

技名からはとてもそうは見えないが、一流どころか下手な超一流でも巻き起こされる衝撃波に触れただけで倒せるだろう豪腕が途方もない速度でぶつかった。

「皆さん伏せてください！」

「姫様伏せて！！」

さっきまでの余波で地形が変わっていたのだ。それが先ほど繰り出していたものよりもさらに凄まじい一撃が引き起こすであろう衝撃波に備えてアリカ姫やタカミチ、クルトを大急ぎで地面に伏せさせて全周囲防御をおこなった次の瞬間。

ズドン！

至近距離に砲弾が落下したような音の後に、周辺に生えていた樹木の数本と岩といくつか吹き飛ばすほどの衝撃波が彼らがいる地点に到達した。

2発目が来るかとまだ防御を継続していたアル達がいつまでも来ない2発目を不思議がり防御を解きラカンたちがいる場所を見てみると。

大笑いしているラカンと膝を突きうつむいているマミがいた。

「どうやらラカンの勝利のようですが」

「勝利の理由がわからんな？マミもラカンも軽傷といっていい状態だぞ」

「直接聞けばいいじゃろう。向かってきておるしの」

勝負が決した理由がわからずにアルと詠春が不思議がっている間に立ち上がったマミとひとしきり笑ったラカンが向かってきていた。

「おつかれ！それで勝因はなんだったんだラカン？」

「ああ、こいつ同じ技名を2回言ったんだよ」

「く、少しこだわりすぎたわね」
「どんな勝負をしてるんだお前らは！」
周辺の被害に比べてあまりにも子供じみた勝利条件に思わず詠春が突っ込んだが。
「何いってんだ、技名は重要だろうが」
「そうよ。それに詠春だって叫んでいるじゃない」
「ぐ……、しかし私のは神鳴流としての」
「「おなじだろ（でしょ）」」
が、お前も同じだと逆につっこまれてしまい撃沈された。
「おもしろそうだな！次は俺としようぜ、もちろん同じルールでな！！」
次は俺だ！と意気込んだナギだったが2人のほうは
「いや、ナギお前じゃ無理だ」
「何でだよ！」
「だってあなたって言うか魔法使いは」
「「技名固定じゃない（だろうが）」」

「しまったーーーーー！！」

精霊の命令を出すために魔法の詠唱や魔法名は変更ができず。身体強化だけでは2人には太刀打ちできず、無詠唱ではそもそも勝負にもならない。

自身の致命的な弱点に気がついたナギが膝から崩れ落ちる姿を横目に。

「アホじゃろ」

「アホですね」

今日も紅き翼は平常運転のようだ。

模擬戦（後書き）

こんな感じの話を思いついたら載せていきます！
あまりシリアスや真面目な話を期待しないように！

神にも悪魔にもなれる力

これは魔法世界のとある地方で起こったお話。

そこはのどかなのどかなゆっくりと流れる時間が特産とも言われている片田舎で目撃された恐怖の光景。

この片田舎は少数の住民が暮らすだけの場所だった。数日前に何人かの人物が少しはなれた湖にある貴族だかのお城を聞きに着たくらいでそれ以降もいつもどうりの日常が過ぎていくはずだった……。

それは突然起こった。日も暮れて皆が明日に備えて寝ようかとしたときに西で―貴族の城がある方角―で先ほど沈んだはずの太陽の光がきらめいた。

何事かと慌てて周辺が見渡せるひときわ高い木に若者がのぼり、魔法具によって捕らえた映像は見えいた者全てに恐怖を植えつけた。

天高く立ち上る巨大な……巨大なきのこ雲の姿を……。

事の起こりはある一言から始まった。

「お前の銃召喚ってどれくらいが限界なんだ？」

仲間の不思議な魔法にそんな疑問を抱いたことが全ての始まりだった。

「いきなりね……。でも、自分でも何処までいけるか把握してなかったわね」

「じゃあ、試してみたらいいんじゃねぇか？あいつらの話しだともう少しかかるみたいだしよ」

「そうね」

雑魚つぶしが粗方終わり、敵方の幹部や大物協力者とやり合う機会も増えてきて以前より忙しくなったが待機中が暇なことは変わってなかった。

使用者もまた自身の魔法の限界を把握してなかったことに気がつき暇つぶし兼限界を見極めるために自身の内へと意識を向けた。

それから暫くして彼らの前には途方もなく巨大なつつが出現していた。

「ふぅ、大きさはここが限界かなぁ」

「でけぇーなぁ！どれくらいあんだ？」

「大砲のほうは１００ｃｍ７５口径で材質は超合金ニューＺ、砲弾

は超合金ニューZを弾殻にして炸薬は光子力爆弾よ」
「さっぱりわからねぇがとにかくすげぇんだな！」
「ええ、それは保障するわ！これ以上は私がイメージできないから無理ね」
「さっそく試し撃ちしようぜ！的は……あの山がいいんじゃないか？」
「だな、程よく離れていてデカイからちょうど良さそうだな」
「じゃあ、さっそく…」
3人が威力を見るために放とうとしたときに。
「何をやってるんですかあなた達は……。敵の拠点が判明しました。今から攻略に移るので着てください」
調査が終わり3人を呼びに来たアルが呆れた声でそういった。
「なんだよ、今いい所だってのに」
「それは帰ってきてからでも」
「いや、ナギ。これはちょうどよかったかも知れんぞ」
「何でだよ？」
「これを敵の拠点にぶっ放せばいいじゃねぇか。そうすれば一石二

鳥だぜ！」

「確かにそうだな！よし行くぞ野郎ども！！」

「ちょっとそんなに急かさないでよ」

後に彼は言う

「あそこで無人の禿山に撃たせておけば被害は多少は少なくなったかもしれない」

と。

集結した赤き翼の面々は湖に立つ敵の拠点が見える丘にいた。

そこでアルが全員にあの敵の拠点がどうのような役割か、補給はどうなってるか、戦力はどうかなど言ったが。

「マミさっさとぶっ放そうぜ！」

リーダーのこの一言で作戦会議は終了してマミが召喚を開始した。

使用者であるマミとバグ２人はまじかで見るために移動しなかったが、呼び出されたものを見て他のメンバーは一目散に距離をとった。

「あれを見る前は大丈夫なのかと思ったが、今はこっちが大丈夫なのかと心配になってきたぞ……」

「全くですね。タカミチ君とクルト君は絶対に結界から外には出ないように」

「「は、はい……」」

メンバー全員がなんともいえない目で見つめているのをよそについに発射体制が整った。

「じゃあ、いくわよ！」

「おう！派手に頼むぜ！！」

「さんざんこっちをおちょくってくれた相手だやっちまえ！」

「ティロ！フィナーーーレ！！」

マミの発射の合図と同時に3人は仲良く宙を舞った。

それを離れたところから見ていたメンバーは一部始終を見ていた。

「おい、発射の衝撃波であいつら吹っ飛んでいったぞ……」

「彼らなら大丈夫でしょうけれど、まさかこれほどとは……」

あまりの事態に呆れているとマミからおおよその着弾までの時間

を聞いて時計で測っていた詠春が。

「そろそろ着弾するぞ！」

立ち上がりかけた体を再び伏せて先ほどの光景もあって閃光防御も追加した障壁を張った次の瞬間。

敵拠点で何かが衝突したと思しき土煙が上がり、暫くして強烈な閃光、途方もない衝撃波と熱波が彼らがいた地点まで押し寄せてきた。

閃光防御をしていなければおそらく今頃目をやられていただろう。それにここが無人地帯でよかったと思い拠点に目を向けてみたが。

「……おい。拠点は何処に行った？」

「何処にもありません。あの煙の中には穴しかとらえられませんよ」

「無茶苦茶じゃな……」

砲弾が命中した敵拠点は跡形もなく消え去っていて爆発が引き起こした波によって周辺もかなりの被害が発生していた。

それから気がついた3人に説教の後、先ほどのものは永久封印するようにと通達してこの事件は幕を閉じたが。

周辺住人の心に恐怖を植えつけ、マミに改めて自身が貰った力がどのようなものかを思い知らした。

神にも悪魔にもなれる力。さらには神を超え悪魔を殺すことさえ出来てしまう力。それがどんなものかこの事件は強烈にマミに知らしめた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2377ba/

真ネギま☆マギカＺ―外伝―

2012年1月6日01時47分発行